

不惑を迎えて間もない頃、私は胃がんで胃と脾臓を全摘した。残された余命は限られている。そう覚悟し決めていた私が、とうしたわけか、その後四〇年近くも生きて、昨年、古希を迎えた。まさか生きてその日を迎えることができると、思っても見みなかつたことである。

鈍臭い、^{どぐさ}という言葉がある。今は死語のようになっていたが、辞書によると、この言葉は、のろくさい、間がぬけている、などを意味する言葉で、そこには漫才の「ぼけ役」のような、どことなく笑える愛嬌が言葉に込められている。

私の故郷では、この言葉が「どんぐさい」と訛り、日常的に使われていた。その意味も、愛嬌のある「のろまさ、間ぬけ」ではなく、裏に「どうにもならない」という意味あいを含む嘲笑、侮蔑を込めた使い方がなされていた。つまり、「どんぐさい」とは、人並みに卒なく物事をこなすことができな駄目人間、そしてその名詞形が、「どんぐさ」、なのである。

如才なく時流に乗る、小利口な生き方を嫌う、という意味で、私こそ、その「どんぐさ」で、私の七〇年の人生は正にその「どんぐさ人生」そのものだったと、つくづく思う。しかも、私の「どんぐさ」には、上記の意味のほか

「土草（人が見向きもしない路傍の草）」の意味も重なっている。

その私の、どんぐさ人生を、少し書いておきたい。

一、私が生まれたのは三重県亀山市で、当時は鈴鹿郡神辺村と呼ばれていた。亀山は、伊勢亀山藩の城下町で、旧東海道の宿場町でもある。その頃は、これといった産業もなく、活気のない田舎町で、ただ国鉄の亀山駅（現在のJR亀山駅）が、関西本線と参宮線の分岐点となっていた関係で、田舎の駅にもかかわらず機関区が設置されていて、多くの人が鉄道関連の仕事に就き、それが地域経済の支えになっていた。だからその頃の亀山は、鉄道の町で、私の父親も機関士として停年まで国鉄に勤務していた。

亀山は、名古屋と港町とを結ぶ関西本線の、ほぼ真ん中あたりに位置し、列車が亀山駅に入ると機関車（当時はすべて蒸気機関車）の水や石炭を補給したり、機関車のつけ替えをしたりする関係で、亀山機関区には機関車の格納庫や転車台、石炭や水の補給設備などが完備されていて、無煙化によって車両がすべて気動車になった現在より、駅の規模も職員の数も多く、鉄道ばかりは今よ

りずっと活気があった。

私が産まれて間もなく、日本は真珠湾攻撃で米英と戦端を開き、太平洋戦争へと突入していった。その頃の息づまるような社会の状況は数々の書籍や映像によって伝えられている。

私自身はまだ幼かったため戦争体験は勿論ないが、それでも、空襲を告げるサイレンのけたたましい音、「空襲警報、空襲警報！」と、メガホンを手に告げ廻っている警防団の人達の声や姿、それを合図にみんなが一斉に防空壕へと逃げ込む慌ただしさ、グオーと迫ってくるB29の肌を圧するような不気味な爆音、グラマンの機銃掃射のけたたましい響き、恐怖に静まりかえる防空壕の中の異様な緊張感、爆撃機が遠ざかり警防団が触れ回る空襲警報解除のメガホンを合図に、みんなが壕から出てほっと一息つく人々の安堵の姿、桐林の遙か遠く、四日市や津の町が敵の焼夷弾で焼かれている情景を、人々が茫然と眺めている姿など、断片的な記憶が、かなり鮮明に残っている。

父親は国鉄勤務の安月給取りであったが、六反歩ほどの田畑があったお陰で、耐え難い飢餓に苛まれることはなかったが、それでもひもじい思いは毎日、食卓に出されるご飯にはサツマイモや大根が多量に混ぜられていたし、肉や魚

など減多に口には入らなかった。敗戦によって多くの兵士が復員するようになって、食糧不足が一段と深刻化し、私の家にも毎日のように名古屋や和歌山から、米の買い出しに来る人が絶えなかった。食料管理法の厳しい時代である。その人達が焚き火を囲みながら、振る舞いの焼き芋を食るように食べている姿や、衣服の下に米をつめた細く長い袋を胴巻きにしている姿が目には焼き付いて今も離れない。

食料ばかりでなくあらゆる物資が極端に不足し、その頃は、みんながギリギリの所で、その日、その日の命を繋いで生きていたのである。食が溢れ、食べることを拒ばむ子供が出てきたり、物資が有り余り、次から次へと使い捨てる現在の社会のあり方を「何か間違っている」と感じるのは、飢えの時代を生きてきた人間の、単なる愚痴、と済ましてしまえる問題であろうか。

長い日本の歴史に照らしても、この列島で、皆人が飽食に倦んだ時代はかつてなかったし、平和が長く続いた例しもないのである。しかも、飽食に倦む多くの人の陰で、もっと多くの人々が、その日の食を得られず、飢えに命を失っている現実を、深刻に受け止めて人がどれだけいるであろうか。私は、漫画やゲームに浮かれている若い世代の人々が、人間の生きる原点を見失っているよ

うに思えてならないのである。

敗戦後の困窮と飢えの時代は朝鮮戦争を境に徐々に回復へと向かっていった。私が小学校に通うようになった頃、旧東海道のバイパスとして国道1号線の工事が始まった。この道路は朝鮮戦争の経験を踏まえ、GHQ絡みで有事の戦略物資の輸送路確保を兼ねた国策工事であったらしく、突貫工事で、それこそあつという間に開通したように記憶している。当時はウンボやダンブなどない時代で、工事はほとんど人海戦術で行われていた。土砂を運ぶトロッコが珍しく、人夫がトロッコを押すのを傍でながめたり、工事が終わった夕方に工事現場のトロッコの、先へ先へ延びる線路をたどって歩いて楽しんだのを覚えている。

朝鮮戦争の頃は、まだ国道1号線が開通していなかったので、進駐軍（米軍）の部隊移動も道幅が狭く、大型車両の通行には適しない旧東海道に頼らざるを得なかった。その頃の私の実家は、旧東海道に面していたため、家の軒すれすれに迷彩を施した進駐軍の大型軍用トラックやジープ、それに見たこともない水陸両用車両などが数十台、時には百台を超える隊列を組み、砂埃を巻き上げながら猛スピードで通るのを毎日のように目にした。砂煙で視界が効かなくなるためか、真昼でも煌々とライトを灯しながら走る軍用車両が残すガソリンの排煙の匂いに、畏怖に似た気持を抱いた記憶がある。まだその頃は日本の車は、バスもトラックも、すべて木炭燃料に頼っていて、それが当たり前の時代であったから、進駐軍のガソリン車両の力強さや、ガソリンの排煙の独特の匂いに国力の違いをまざまざと見せつけられる思いがしたのである。

私が中学に進んだ頃、サンフランシスコ条約が発効し、日本が占領政策から解放され、やがて高校を卒業する頃には、日本は高度成長の時代へと突入していた。私は、高校を卒業し、上京するまでの一八年間を、この郷里で過ごしたのである。父は国鉄の職員をしていたが、俸給は知れていて、六反分ほどの田畑を耕し、兼業農家の半自給自足の生活で、かつかつ生活がなりたっていたのである。父は、日曜日しか野良に出ることが出来なかったもので、半農の我が家では母親と私と二歳年上の次兄が農業の担い手で、私も小学校の頃から母を手伝って野良で働いた。長兄は東京の大学に学んでいて、夏休みなどで帰省し、たまに野良に出たりすると、疲れのため翌日には熱を出して寝込んでしまうと、いった有様で、年の離れた弟から見ても頼りにならない人であった。耕運機など、まだどの家庭にもなかった時代であるから、田起こしも、田植えも、稲刈りも、当時は牛や人の手に頼っていたのである。事情はどの農家も似たりよっ

たりで、そのため農繁期には、小学校も中学校も、一週間ほどの農繁休暇というのがあった。どの農家でも、農繁期には小、中学生の手を必要とした時代だったのである。

日本が本格的な高度成長期に入り始めたのは私が高校を卒業した年、つまり池田内閣が発足した頃からのので、その間の故郷の変化といえば、無煙化と称して国鉄の車両が、それまでの蒸気機関車が牽引する列車から段々とジーゼルの気動車両へと切り替えられていき、それに伴い蒸気機関車が少しずつ姿を消していったことぐらいで、町も、それを取りまく自然も、大きな変化はなかった。

私が郷里を離れてから、高度成長期の時代の波は、世間から置き去りにされたこの村にもやってきて、村やそれを取りまく自然は見る見る姿を変えていった。やがて名阪国道が開通し、私達の貴重な遊び場であった原や里山が切り開かれ、そこに幾つかの企業が進出して人口も徐々に増えていった。

十年ほど前には、県と市が高額の補助金を出してシャープの大型液晶工場を誘致し、関連する企業も幾つか進出してきて、大きな工場団地が誕生した。クリスタルバレーなどと称し、そこで製造される液晶テレビを「亀山モデル」などとテレビコマシャルで宣伝され、亀山という町の名も少しは人に知られるようになった。それまで、私の住んでいた村は、夏は盆地独特の蒸し暑さ、冬は鈴鹿風の吹き下ろす貧村でしかなかったのである。

反面、開発が進んだ結果、その分、周辺の町も村も、それを取りまく自然も、大きく姿を変えていき、今や鄙びた農村のたたずまいは、すっかり失われてしまった。墓参で帰省するたび、便利さ、豊かさと引き替えに、どんどん変わっていく郷里の姿に仰天もし、私の子供の頃の貴重な思い出が、それを恵んでくれた自然もろとも、すっかり奪い取られ、まるで人生の一部をむしり取られていくように思え、淋しいような、悲しいような、腹立たしいような複雑な思いに取りつかれてしまうのである。

人々へ稔りを与え続けてくれた田畑は、今ではそのほとんどが宅地化され、残るわずかばかりの農地も耕作放棄で荒地化しつつある農村の姿は、私には悲しく、そして末恐ろしく、とても直視することが出来ない。

豊かな稔りとやすらぎを与えてくれていた里山は、無残に切り開かれ、緑は影をひそめ、夏になると蛍が湧いて出た小川は、どぶ川と化し、メダカや小鮒は姿を消して、そこには悪臭を放つ汚水や排水が流れている。正月、お盆、秋

祭りなど、村々で長く続いてきた風習や郷土文化は、いつしか廃れ、今ではもう語り草となっている。子ども達は野良で遊ばなくなり、家に籠もってゲームに熱中し、大人は男も女も携帯病にとりつかれ、暇さえあればピコピコ、ピコピコと指ばかり動かしている。たまに本を開いているかと思えば、それは決まって漫画。主婦は料理をしなくなり、スーパーのお総菜を食卓に並べる。町には輸入食材をこねくり回した国籍不明の料理の店がやたらと多く、スーパーやコンビニにはコマースシャル垂れ流しの商品で溢れ、物の善し悪しはコマースシャルの量が決める。次から次へと新しい物を買って求め、町の辻々は不要品のゴミ捨て場と化し、悪臭がただよう。

こうした社会の現実を、進化だ、発展だ、と手放しで喜べるだろうか。

戦後、長らくアメリカの背中ばかりを見つめ、競走に勝て、勝て、をスローガンに、地方も、農も切って捨て、拠点開発で巨大都市に人口を集中させ、狭い日本を、人口の集中する都市部と過疎地域に二分し、資源の乏しい我が、輸入原料に依存する加工型、輸出企業牽引型の経済成長政策にかたくなに固執し、景気が冷え込めば赤字國債を乱発して景気刺激をする。そうやって地方も、農も、中小企業や弱小企業も、すべて切って捨て、大企業優先の経済競争にすべてを託す。その偏った一本道の政策の行きついた先が、あのとてつもない資産バブルの狂騒と、世界にその例をみない膨大な財政赤字、そして、それがもたらす底なしの構造不況なのである。

戦前の日本が、開化以来、富国強兵のスローガンの下、帝国主義の欧米列強と肩をならべるべく、軍備の増強と財閥主体の経済発展を急ぐ余り、その背伸びした過剰なまでの国家意識が、幾度かの戦争を経て、やがて隣国を巻き添えにした自国中心主義的な侵略主義へと暴走し、その誤った一本道が、やかつてフアシズムの台頭を許し、あの無謀な戦争へと突入し、ついには国を滅ぼしてしまっただのである。

四面を海で囲まれ水と緑に富むこの国は、神話のカオスの時代から数千年の長きにわたり、農や漁が、民の生活の支えとなって歴史が編まれてきたのである。敗戦による焼土の中で過去の過ちを反省し、それを教訓として復興へと立ち向かった筈の日本が、目ざしたものが果たして現在のような日本の姿だったのだろうか。

過去の過ちを反省するなら、物質主義に偏りすぎる他国の物まねをする必要などなく、恵まれた豊かな森林と豊富な水、肥沃な耕地、そして豊穡の海がも

たらしめてくれる恩恵を生かし、物質的な豊かさや経済的利益ばかりを偏重する偏った思考を克服して、豊かな精神性と自然を敬う高い理想、そして高い技術とで、再生可能エネルギーを主体とする、他国に例を見ない文化国家となる道が可能だった筈なのである。

そうした視点に立っての長期展望と、それに向けた地道な政策を、戦後の復興期から、粘り強く続けてきてさえおれば、今時、自然エネルギーの利用で世界に遅れをとってみたり、原発事故や、遠い他国の干魘が我が国民の食の喉首を閉めつける、などというお粗末な事態は、起る筈がなかったのである。

少なくとも、歴史も国柄も異なる日本が、アメリカを手本と仰ぎ、これに追随し過ぎるあまり、アメリカという国が抱える、富者が益々富み、貧しい者が益々貧しくなるという、行き過ぎた競争原理がもたらす克服不能の社会の矛盾の姿まで、そっくりそのまま日本に持ち込む必要などなかったのである。

私は、戦後の指導者たちが、早期復興に焦る余り、取り返しのつかない誤った方向へと日本を迷い込ませてしまったと思えて仕方がないのである。

二、話が前後するが、高校を卒業した私は上京して早稲田大学第一法学部に入学した。法学部を選んだのは兄二人が同じ大学の法学部に進んだから。それだけの理由である。なまくらな学生で、授業にはほとんど顔を出さず、いつも下宿でごろごろ。お金がなくなれば昼はアルバイトをし、夜はその金で飲み歩く。親不孝の見本のような学生時代を送った。そのお陰か、罰か、単位不足で4年間で卒業がかなわず留年を余儀なくされた。

神田の出版社で、少年ブックという少年向けの月刊誌の編集の助手をして働きながら足りない単位を取得し、五年間かかってやっと卒業が許された。

その頃、私の大学では学費値上げを巡って学生と大学側が対立し、学生側は全共闘を組織し全学バリケード封鎖を実施していた。学内に入ることも命がけといった状態で、卒業式もお流れとなった。

折しも、日本はオリンピック景気が終息し、高度成長に入って初めての不況が忍び寄り、久々の不景気の中で社会全体が精気を失い初めていた。そんな中で、しかも働きながらの就活なので大変な思いをした。新聞社、出版関係、製薬会社、食品関係、その他ありとあらゆる職種の会社を対象に就職活動をし、不景気で少ない求人募集の中から三〇社近い企業に願書を出したり、試験を受けたりした。しかし、深刻な不況の中、テンプレ学生など採用してくれる会社

などある筈もなかった。

幾つもの試験会場で目にした現実には、国公立と私学に対する会社側の露骨なまでの差別扱いだった。面接会場や控え室が別に設けられるのはまだましな方で、有名国、公立の学生は別枠の試験抜きで採用が決まっただけで、我々私大組はその穴埋めのための雑兵扱いといった会社がほとんどであった。

「こんな成績では推薦状は無理だ」、成績表を見て慥然と腕組みをする学部長を拝み倒すようにして推薦状を書いて貰い、最後に受験したのが神戸の毛糸編機の製造販売をしている会社だった。高卒、大卒を併せ四〇名の採用枠に何とかすべり込んだ。

三、阪急西灘駅（現在の王寺公園駅）近くにある木造モルタル塗りの粗末な本社２階に、２段ベットのがずらりと並んだ大部屋が社員寮になっていた。タコ部屋のようなお粗末な寮に、新入の四十名の社員の全員が詰め込まれ、十名も入れれば満員になるような狭くて汚ない食堂で朝夕の粗末な賄いを振る舞われながら、毎日、神戸や尼崎の町々で、飛び込みセールスに廻らされた。日に百件の飛び込みが最低のノルマで、一人一人の売り上げが棒グラフに記入され、目

立つ場所に掲示された。私のグラフの棒はいつまで経っても成長しないままだった。それでも先輩の監視の目が光っている。契約が取れないからといって怠けるわけにはいかない。その日、その日に廻る区域が割り当てられ、来る日も、来る日も割り当てられた区域内の家を一軒、一軒、しらみつぶしに廻っていくのである。そんなやり方をするお隣さんは当然に次は我が家と気づく。当然、鍵を閉めて留守を決められてしまう。留守の家の戸を幾ら叩いてもノルマの一件には入らないのである。居留守を見抜き何度も粘ると「いらん」と窓越しに大声で怒鳴られたり、「うるさい、二度と来るな」と怒声と共に洗面器の水をぶっかけられたりと、それはもう散々な目に会い、毎日がこれこそ生き地獄であった。

今、思い返してみても、セールスというのは不思議な仕事で、上下そろいのスーツにネクタイで身なりを整え、礼儀正しく接客する者が成績を上げるとは限らない。小指が欠け、身なりも横着ならば、言葉遣いも乱暴で、会社のバッジをつけていなければ、それこそヤクザか街のチンピラと間違われそうな男が、図々しくお客の部屋に上がり込み、馴れ馴れしく話しかける。そんな類が毎日のように契約をとってくるのである。そこには詐欺、強要すれすれの、それこ

そ秘伝のようなセールの奥義があるものらしい。

「港の灯が消えた」

そんな言葉が神戸の街々で囁かれるほど、その頃の神戸の街は沈滞していた。神戸の港の港湾荷役を裏で取り仕切っていた暴力団山口組が、三代目の田岡組長の代になり、全国へと組織の網を広げようとして活発な武闘闘争を展開していた。こうした動きに警察当局は頂上作戦を展開し、山口組本家の捜索や、幹部の一斉逮捕に踏み切ったりしていた。折も折、田岡組長の懐刀といわれた舎弟の岡精義（おかきよし）が逮捕され、獄中で山口組脱退を宣言し、その記事が新聞に大きく取り上げられ世間を賑わせていた。

生き地獄の私のようなセールの人生は、意外と短い期間で、それもあつけないで終わった。会社が不渡り手形を出して倒産したのである。今から思えば、糸編み機のメカに関する幾つかの特許を持ち、業界では少しは知られた会社ではあったが、売り上げからすればブラザー、シルバーといった大手からはかなり水をあけられていた会社が、四十名もの新規採用に踏み切ったのは、恐らくは無理を承知で多量の販売要員を確保し、遮二無二売り上げを稼いで会社の生き残りをかけたのに違いなく、それが恐らく裏目に出たのであろう。

会社の寮を出て、数名の同僚と共に、近くにアパートの一室を借り、毎日職探しをした。しかし、不況下のこと、良い就職口があるはずもなく、途方に暮れた。神戸は山と海に挟まれ、帯状に広がった坂の街である。夜になると、何処にいても港の灯りが自然と目に飛び込んでくる。その灯りに誘われて毎夜のように坂を下り、メリケン波止場へと下りていった。

夜の九時頃だったと記憶している。いつも決まった時刻に出航していく別府航路の船があった。「蛍の光」の曲に送られて港を後にしてゆく、その船の灯りをぼんやりと目で追いながら、私は目の前の暗い海原へ何度飛び込もうと思っただか知れない。その頃の私には自分の人生に希望を見いだせなくなっていたのである。遠ざかる船のデッキで、幸せそうに手を振る新婚カップルを、祝福の笑顔で見送る心のゆとりなど、その頃の私の心からすっかり失せてしまっていた。

こんな時、郷里の母から電話があった。東京で就職していた次兄の結婚式があるので上京して出席するように。用件はそれだけだった。このまま私を神戸に残して置いては危ない。遠く離れたところから母は私の心を見ぬいていたのちにちがいない。結婚式が終わった夜、私は母や長兄から諄々と諭された。もう

一度大学に戻って出直せと…。

頑なに拒んでいた私が、それを受け容れたのは、夜が白々と明け染める頃だった。それまでの私はこのまま神戸で何とか生活の道をさがし、行く末は文筆で身を立てたい。そんな身のほど知らずの、夢のようなことを考えていたのである。

私は神戸に戻ることなくそのまま東京に残り、翌年の春、早生田大学の大学院に入った。専攻は民法法学であった。親の学資援助には条件がついていた。司法試験に合格すること。それが絶対の条件なのだ。学部時代は授業にもほとんど出席せず、法律の本も碌に読んだことのなかった私である。大学院のゼミについて行くのは容易ではなかった。加えて司法試験の勉強も始めていたから、それこそ死もの狂いの毎日であった。大学院は研究の場で、基礎法学に重きをおいている。実務的な司法試験の勉強とは両立しにくいものなのである。とにかく時間が足りなかった。通学の満員電車も吊革につかまりながら片手で法律の本を広げた。四、五日で一冊の基本書を読み終える。それが最低のノルマになっていた。

正直いえば法律なんか大嫌いで、法律の実務家になることなど決して本懐ではなかった。すべて生きるための方便であった。

四、幸い、司法試験は三度目の受験で合格した。それからは修士論文をまとめるため、大学院の読書室に籠もりきりになった。そんなある日、司書の女性が「仲野さん、これ見ましたか」と、新聞の号外を手渡してくれた。

そこには作家の三島由紀夫が起こした、衝撃的な事件が、写真入りで生々しく報じられていたのである。

事件とは、三島が楯の会の会員四名を引き連れ、自衛隊の市ヶ谷駐屯地内の東部方面総監部へ乗り込み、総監室で当時の益田総監を人質にとり、割腹自殺を遂げたという血なまぐさい出来事であった。

紙面には、総監部に乗り込んだ三島が、自衛隊員に決起を促す檄文を撒き、自らバルコニーに立ってアジ演説をぶつたものの、自衛隊員からは思わしい反応がないばかりか、むしろ反発の声さえあがるのに失望し、演説を打ち切って総監を人質に総監室にたて籠もり、そこで割腹自殺を遂げるに至るまでの顛末が、特大の見出しでセンセーショナルに報じられていた。

一面にデカデカと掲載された写真には、血の海と化した総監室のフロアーに、

同志の介錯で打ち落とされた三島の首がごろりと転がる、鬼気迫る写真が掲載されていた。

昭和四五年一月二五日の出来事である。

私は言い知れぬ衝撃を受けた。私は決して三島の信奉者ではないし、むしろ三島の言動にはかねがね批判的な目で見ていた一人なのである。なのに事件に強い衝撃を受けた理由は今でもうまく説明できない。三島がこのような行動に出た思想的背景については、様々な人が様々な観点から論じている。その究明は三島研究者にお任せするとして、号外の記事と写真を見て、私が直感的に思ったのは陽明学であった。彼が陽明学に関心を抱いていたことはその作品からも窺える。彼の遺作になった「豊饒の海」の四部作は、輪廻転生をテーマにしたものと言われている。その点は作品の構成や、その内容からも領けるが、作品の背景に仏教の唯識哲学と陽明学があることも明らかである。とりわけ最後の作品である「天人五衰」は唯識仏教の知識なしにはとても理解が出来ない。そこには、第一作の「春の海」で、主人公として登場した伯爵家の令嬢の綾倉聡子（宮妃として嫁ぐことが決まっていたが、侯爵家の嫡子松枝清頭と禁じられた恋に身を持ちくずし、うら若い身で尼となった）が、住職を勤める奈良帯解の月修寺へ、四部作を通しての裏主人公である本多繁国が老残の身となって訪ねていく下りがある。

その部分で、今は、門跡を勤める老いた聡子と老いた本田との、亡き清頭を巡ってのかみ合わない長い会話の後に、聡子がぼつんと漏らす言葉、

「それもこれも心々（こころごころ）ですさかい」

という一言で、四部作六〇年の物語のすべてが、三界唯識、心外無別法を説く唯識の、人々唯識（にんにんゆいしき）の心の世界の中へと包摂され、長い物語の結末を迎えることとはご承知かと思う。

奈良仏教の法相宗（今は興福寺、薬師寺など）が説く唯識哲学と陽明学には私もかねてから強い興味をもっている。唯識哲学は大乗仏教の空の本質を瑜伽の実践をとおして体系づけた宗教哲学であるのに対し、陽明学は儒教の流れにある政治哲学で、その説かれる目的や本質を異にするが、朱子学までの儒教の流れが、どちらかというお客間的な唯心論ともいうべき性質を帯びていたのと異なり、陽明学は主観的唯心論の性格が濃い点で、極微から大宇宙まで、ありとあらゆる存在を、すべて自らの心の中の影像（ようぞう）と説く唯識哲学と相通じるところがある。「豊饒の海」の四部作は、輪廻転生をテーマにした作

品だが、その中には陽明学的な発想が展開されている作品もあることはご承知のとおりである。恐らくは、知行合一をとく陽明学的発想は、三島独特の大義に死するを究極の美とする、独自の行動美学と、彼の中で強く結びついていたのだと思う。その意味で総監室での切腹は、彼にとつての美学の最後の総仕上げだったのではないか。三島の多くの作品の中で、唯一、遺作となった「天人五衰」の末尾にだけ、

「豊饒の海」完、昭和四十五年十一月二十五日

と、脱稿の日が記載されているのも、決して意味の無いことではないと思われる。彼は「天人五衰」を脱稿したその足で、自衛隊の東部方面総監部へと向かったのである。

私の七〇年の人生の節目、節目の曲がり角で、三島の事件が突然フラッシュバックしてくるのである。

思えば、私がこれまでの人生で何度か迎えた大きな曲り角で、私の中の唯識や陽明学的な思考が、その時々々の行動の原点となってきたような気がする。私、その場、その場の空気を読んで、遊ぎ上手に世渡りをすることを嫌うのも、それが原因なのかも知れない。そういう意味で三島の事件は、思想的な側面は別として、心のどこかで情動的に共感するところがあるのだろうと思っている。格別知至を説く朱子学が、そこに説かれている行動の原理たる究極の大義なるものが、全く捉え所のない観念的な規矩でしかなく、結局のところ、それは寄らば大樹の影的な思考に繋がってしまうような気がして私にはどうしても馴染むことができず、大勢に迎合することが嫌いで、常に独自の判断で独自の生き方を求めたがる私は、どうしても唯心的な要素のより強い陽明学的な発想に惹かれてしまうのである。

五、私は、当時二年間の司法修習を終え、裁判官への道を選んだ。私の性格はとても検事向きではないし、世渡り下手な私には、弁護士という職業も、重荷に感じられたからである。

大津地裁を初任に、横浜地、家裁横須賀支部、東京地裁と転勤をした。任官した当初から私は裁判所のもつ独特の空気になじめないものを感じていた。東京地裁に赴任してからは「ここは私がいる場所ではない」とはつきりと自覚した。その理由はまた別の稿で詳しく述べたい。

六、東京地裁での任期を一年残して退官し、西も東も分からない大阪で弁護士登録をし、法律事務所を開業した。昭和五六年春のことである。

どうしてなじみのない大阪で開業したのか。よくそう聞かれた。私としては、裁判官を辞めていきなりの開業なので、まさか郷里の片田舎で開業するわけにもいかず、妻の実家のある大阪を選ぶほかなかったのである。それから約二五年余の間、弁護士として働いた。その間、いろんな人と出会い、いろんな事件を担当し、沢山の経験をした。

開業後六年ほど経った頃に胃癌に倒れ、胃と脾臓とをすべて失った。その後は闘病と弁護士業の二つの「仕事」との格闘の日々であった。そこへもってきて、その数年後には、長らく精神的に不安定であった妻が、実は重い精神病を抱えていることが判明し、入院を頻繁に繰り返すようになった。それから、妻の介護と学齢期にある二人の子供の世話もすべて私の肩にのしかかってきた。いくつもの重い荷物を背負つての、それこそ息絶え絶えの生活であった。平成一八年に妻の介護に専念するため弁護士を廃業し、老々介護で妻の面倒を見ていたが、その妻も、昨年の一一月に入院先の病院で、肺炎をこじらせての敗血症で眠るように旅立っていった。

弁護士を開業してから得た友も、その多くが若くして惜しまれながら旅立っていった。

闘病に苦しむ妻の姿を傍で長らく見つけ続けてきた私は、釈迦が説いた「五蘊盛苦」ということを日々考えさせられた。長生きすることが幸せなのか、むしろ不幸なのか、もとより、それは考え方、生き方の問題であろう。今は、私なりにその事に関する自分の結論を持つに至っているが、その辺のことも、機会があれば綴ってみたいと考えている。

長男を不幸な死なせ方をし、長い間、病む妻を長いあいだ看取ってきた私は、妻の死で、介護や家事からは解放されたが、今度は老いと孤独という、別の荷物が肩に重くのしかかってきている。私のどんぐさ人生に、また新しい節目がやってきているのである。

忍山 諦